今月の読み物

菱大木材株式会社　取材報告

取材：月報委員・伊藤、井上

今回は新木場に唯一残っている南洋材の丸太挽き製材、菱大木材さんにお邪魔して大堀社長に話を聞かせていただきました。

旧木場の丸太挽き製材は業者も多く戦後は隆盛の一途で、堀という堀、川という川は筏で埋め尽くされていました。私の店は柱やで水面を使っていなかったので筏業者が筏を置いていました。盆暮れには何か届いていたのを覚えています。地盤沈下で筏が橋の下を通りにくくなったのも新木場移転の理由のひとつでした。

新木場移転時は堀を囲むように製材工場が配置され、一丁目から三丁目まで筏づたいに渡って行けるほどの丸太が浮かんでいました。

新木場移転時の水面の様子

ラワンは幅広の無節が取れること、柔らかく加工がしやすいこと、値段も安価だったことから重宝され大量に使われていました。学校の造作、内装はほとんどラワンで夏休みには改装や修繕の工事が多く皆それぞれに忙しかったそうです。

工場を持たない地挽屋など関連業者も多く、筏屋、結束屋、目立て、防虫工場もありました。

一口にラワンと言いますがフタバガキ科植物の総称で実際にはいろいろな種類があり、中ではインド

ネシアのホワイトメランティーが最高だったとか。

その頃の商売の流れを聞かせてもらいました。

総合商社も専門商社もありましたが、まず商社が輸入。原木問屋に卸します。原木問屋は製材用と合板用に仕分けした後、品質が平均化するように組み合わせ筏業者に筏組を依頼します。

その筏を製材業者は検分に行き、値段品質が折り合えば購入する運びになります。その時使っていたモーターボートが今もやってありました。新木場の合板工場がなくなって以降は東京港に丸太が入ることは無くなり、今は名古屋方面からの陸送がほとんどでボートは趣味の釣りにしか使わないそうですが。

現在の水面

筏屋さんの仕事風景

購入した筏は工場の岸壁まで筏業者が運んできます。筏屋も三社あったのですから仕事量も多かったのでしょう。それをウインチで引き上げ工場に運び込みます。

大径木はフォークリフト二台が並んで扱うそうです。

今日はアピトンの丸太を大割りするところが見られました。トラックの荷台、重機の歩み板など確実な需要があるようです。

アピトン丸太の製材

大割りした丸太

何故ラワン製材工場が激減したのか伺いました。

産地国が国内の産業振興を考えて丸太で出したがらなくなったこと。現地挽き、輸入合板が増えたことに反比例して丸太は減っていきました。近年はロシアも同じ政策を取っていますね。

フタバガキ科は幼木のうちは陰樹でジャングルの中のような日陰でしか育たない。大きくなってジャングルから頭を出すと陽樹に転換するが人工的再生産は採算面から難しく、年々資源は減って価格は高くならざるを得ない。

フィリピンのラワン良材はマルコス大統領の時代に伐り尽くしたと聞いたことがあります。

フリー板など競合製品が増えたこと。唯一の欠点とも言えるピンホールの扱いも含め無垢材は自動加工ラインにのりにくい。その結果住宅の階段、幅木など昔はラワンが当たり前だったのにほとんど使われなくなった。

大きな流れになかなか抵抗は出来ないとも聞きました。

関連業者も減り、喫緊の課題は目立てだそうです。高齢化した職人しかおらず、御息子さんを仕込んでいるとか。丸太製材を続けていくぞという気概を感じました。

（文責：伊藤）

工場２階の目立て場

取材風景

正月飾り